曲目解説

■シンフォニア　二長調　　J.S. バッハ

セバスチャン・バッハの場合「シンフォニア」という名称は、カンタータにおいて前奏曲などの役割を果たす器楽だけの楽章に与えられています。多楽章のものもありますが、大体楽章はひとつです。(シンフォニアをもたないカンタータもかなりあります)　そして、それはオリジナルなものでなく、　彼自身の旧作の協奏曲などに手を加えて、転用されたものだと考えられています。ブランデンブルク協奏曲の第３番や第１番が多少形を変えてシンフォニアとして使われているのはそのひとつの例です。

今晩演奏するシンフォニアは、カンタータ第42番「されど同じ安息日の夕べに」の冒頭に置かれているものです。楽章はひとつですが、おそらく今では失なわれてしまった協奏曲の第１楽章であると思われます。編成は、二つのオーボエ・ファゴット弦楽合奏ですが、本日は第１オーボエのパートをフルートで演奏します。

■なき王女のためのパーァーヌ　　M. ラベル

この曲は、ラベルが、まだパリ音楽院に在学中の1889年に作曲したピアノ曲が原曲で、11年後の1910年に管楽曲に編曲されました。

「パヴァーヌ」は16世紀の初期に宮廷で流行した舞曲で、最初は三拍子でしたが、のちに二拍子の曲になりました。又「パヴァーヌ」という名称は、ラテン語のPavo(孔雀)から来たもので、孔雀のように、高雅に荘重に踊られるわけです。このラベルの曲には、遠い記憶を辿るような趣があります。

■弦楽のためのセレナード　　A. ドボルザーク

ドボルザークには、多楽章の器楽用のセレナードが二曲あります。ひとつは、管楽器を主体とした二短調作品44で、もう一曲は本日演奏する弦楽合奏のためのホ長調作品22です。

曲は五つの楽章からなり、1875年５月３日から14日にかけて作曲されました。相当な速筆です。作曲の動機としては、ブラームスの二曲の管弦楽用セレナードからの刺戟が考えられます。曲にもその影響が認められます。

ドボルザークは、この曲をハンス・リヒターの指揮によって、ウィーンで初演する計画をたてました。これは結局実現しないで、1876年12月10日にプラハ・フィルハーモニーによって初演されました。ウィーンでは、1884年の２月24日にクレッチュマンの指揮で初めて紹介されました。

■交響曲第40番ト短調K.550　　W.A. モーツアルト

この曲は、モーツアルトの交響曲の中で最も有名なもので、39番、41番「ジュピター」と共に彼の「三大交響曲」と言われています。

この曲だけでなく、彼の短調の作品（数は少ない）と長調の作品との甚しい相違(それは、形式の面ではなく、表現及び内容の問題として）は、モーツアルトの精神の断層を思わせます。

彼の自作品目録によると、この曲は1788年の７月25日に完成しています。当初の編成は、フルート１、オーボエ２、ファゴット２、ホルン２、弦楽合奏でしたが、のちにクラリネットが加えられ、それに伴ってオーケストレーションが若干修正されました。本日はその第二稿で演奏します。